

日吉台地下壕保存の会会報

第95号

日吉台地下壕保存の会

年頭の挨拶

日吉台地下壕保存の会 会長 大西章

明けましておめでとうございます。本年も日吉台地下壕保存運動をよろしくお願ひします。

1999年4月に会長代行に、翌年4月に会長になり10年になります。10年前は1年間にガイドした見学者が約1000名でしたが、現在は約2200名を越え、2倍以上の方を案内しています。その中に小中高生も含まれ、若い人たちへのアプローチもうまく行きつつあります。一方、ガイドをする方は高年齢化が問題になりましたが（ただし、年齢を重ねても皆さん元気に頑張っています）、今年で4回目になる「ガイド養成講座（現在進行中）」を開催したところ、毎回元気な方々が参加してくださり、見学会の戦力として大活躍しています。地域と密着した活動がボランティアの輪をどんどん広げています。

昨年はまむし谷体育館建設に伴い軍令部第三部・航空本部等地下壕入口が3か所発掘されました。慶應義塾はすぐに専門家を集め「諮問委員会」を立ち上げ、答申後地下壕を調査し、現状を壊さずにまた埋め戻し、その後入口を開けられるような状態になりました。いろいろな方のご助力の賜物だと思います。特に4月12日に入口の見学会開催が決まったのが3日前にもかかわらず、300名を越える方が見学に来て下さり、その関心の高さは我々の保存運動に携わるものとしては心強い限りでした。（詳細は会報91号・特集号（2009.6.19）をご覧ください。）

また、17回目になる「川崎・横浜平和のための戦争展」、「戦争遺跡保存全国シンポジウム」は13回になりました。日吉地域のみでなく、横浜、川崎、そして全国とネットワークが広がり、仲間たちが増えています。交流を通して学ぶことの大切さも実感しました。

これからも地下壕を中心にそこに集まってきた方々との出会いを大切に、また専門の人達をも交えて、みんなで学び活動しながら明るい未来へ向かった保存運動を継続し、平和について考えていきたいと思っています。会員皆様のサポートをお願いして年頭の挨拶としたいと思います。今年もよろしくお願ひします。

■よこはま・かわさき 戦争遺跡すぐそばに

川崎中原区写真や絵展示



第17回川崎・横浜平和のための戦争展
神奈川新聞 2009.12.6

■よこはま・かわさき
爆弾模型や偽札も

川崎市中原区から訪れた
女性65%はよく
戦争体験者
がいる
と答えた

自営業の女性65%はよく
戦争などの資料が数多く並
べてある
と答えた

「よく登戸に日陸軍の研究所
があつたことを知つてとても驚
いた。一度、戦争という
同じ體験を踏まないでほし
い」と話していた。
6日は、高校生や若手研
究者のために発表会「戦争
の記憶を引き継ぐか」
が午前10時から、実行委員
会代表の奥田光義（中央大学
名譽教授）らによるシンポジ
ウム「戦争遺跡をいかす平
和ミーティング」が午後1
時から催される。展示は午
前9時半から午後4時半まで。
2009年12月8日

☆ 第17回 川崎・横浜平和のための戦争展報告

亀岡敦子

2009年12月5,6日の2日間、第17回川崎・横浜平和のための戦争展が、川崎市中原区にある川崎市平和館で開催されました。幸いなことに天候に恵まれ、神奈川新聞・東京新聞・毎日新聞・朝日新聞などの報道もあり、寒い時期にもかかわらず、300人を超える方々が来場してくれました。今回は、私たちが長年保存と活用を訴え続けてきた3箇所の戦争遺跡のうちの登戸研究所が、実際に使われていた建物の一部を2010年春、「明治大学平和教育登戸研究所資料館」として、開館することが決まってからの戦争展です。テーマを《 戦争遺跡を地域の文化財に 》としたのは、活用の仕方を考えるのが、私たちのこれから課題であるからです。以下イベントも含めて報告いたします。

☆展示☆12月5~6日

(1) 登戸研究所関係　登戸研究所で印刷された贋の中国紙幣や、幹部の名前が連ねられた出征兵士のための日章旗などの実物資料、風船爆弾の縮小模型、当時の写真、調査研究の成果、見学会の様子などの写真パネルほか。



「市民が描いた戦争の記憶」を見入る見学者

(5) 小池汪写真展 川崎市在住の写真家小池汪さんが長年撮り続けた写真のごく一部を展示、それでも小池さんの平和への強い思いが伝わります。

☆文化行事

☆12月5日「くちびるに歌を 心に平和を」
参加者と応援に駆けつけてくれた合唱団「白樺」
のメンバー全員で、懐かしい歌を合唱し、平和の
有難さを実感しました。

2009年(平成21年)11月12日(木曜日) 川崎 地域の情報 22

『偽造中国元、攻防に迫る



「登戸研究所」関連の初公開資料など

来月5、6日中原区市平和館で展示 旧日本軍の戦時謀略伝える

東京新聞 2009.11.12

(2) 蟹ヶ谷通信隊地下壕関係 現在は見学できませんが平和館には立派なジオラマが常設。他に当時の写真、地下壕内の様子、調査研究の成果などの写真パネルほか。

(3) 日吉台地下壕関係 戦時下の慶應日吉キャンパスの学生生活、海軍連合艦隊を中心とした当時の資料と写真、調査研究の成果、見学会の写真パネルほか。

(4) 絵画展「市民が描いた戦争の記憶」
空襲・学童疎開・敗戦などの記憶の絵画は、
技術の稚拙を超えて見る人の心に訴える

ものがあります。



合唱団「白樺」と一緒に合唱

☆若者の発表

☆12月6日「戦争の記憶をどう引き継ぐか」

- 「平和とは何か?—ハト(鳩)からハートへ—」専修大学附属高校歴史社会研究会8名
 - 「加害の証言をどう受け継いでいくか」荒川美智代さん(撫順の奇跡を受け継ぐ会)
 - 「登戸研究所の開設準備と歴史研究・歴史教育」齊藤一晴さん(法政二高講師)
- 専修高校生の報告は、「ハトはなぜ平和のシンボルなのか」という疑問を様々な方面から研究した大変ユニークなもので、それぞれが考えを深めている事に感心しました。荒川美智代さんは、中国帰還者連絡会の方々の加害の記憶を引き継ぐという、困難な活動に取り組んでいます。この戦争展実行委員であり、研究と高校での教育の両面に関わる齊藤一晴さんは、17年前の若者の発表者の一人でもあります。



専修大学附属高校生の発表



荒川美智代さんの発表

☆シンポジウム☆12月6日「戦争遺跡をいかす平和ミュージアム」

- 「中国の戦争記念館について」姫田光義さん(中央大学名誉教授)
- 「明治大学平和教育・登戸資料館 開設の意義」山田 朗さん(明治大学教授)
- 「戦争遺跡の文化財指定の動向」新井揆博さん(戦跡保存全国ネットワーク運営委員)
- 地域に残る戦争遺跡、見方によればヤッカイモノと取れなくもない戦争遺跡を、どうすれば平和ミュージアムとして活かしていくのか、という議論が交わされました。

☆イベント☆

日吉台地下壕見学会 9月26日

多摩丘陵の戦争遺跡を訪ねるバスツアー 10月25日

明治大学平和教育登戸研究所資料館内覧会 11月23日

今回は、3回のイベントを設けました。中でも秋晴れの一日をかけたバスツアーは、講師の江連恭弘さんの、学生時代からのテーマであるハンセン病資料館をはじめとする多摩丘陵に残る戦争遺跡案内から、多くを学んだ貴重な経験でした。また、難しいコースにもかかわらず、完璧な運転技術で私たちをスケジュール通りに運転してくれた岡上そうさん。江連さんと岡上さんの若い2人に最大級の賛辞を送ります。

このように、今回も大変充実した内容で、全ての行事を盛会裡に終えることができました。2日間元住吉の平和館に足を運んでくださったのは約300人。どの方も展示の前に足を止め、熱心に説明を読んでくれました。また、シンポジウムなどへの参加者は、途中で席を立つ人はほとんどいませんでした。なによりも、川崎市が後援名義使用と事業補助を決定してくれたことは、私たちを力付けてくれました。

また会計を預かる立場からは、会員の皆様にはお礼の言葉のほかはありません。会費以外のお願いにもかかわらず、多くの方が賛助金を寄せてくださいました。おかげさまで、17回もの回を重ねることができました。今後ともご支援くださいますよう、実行委員一同衷心よりお願ひいたします。

☆シンポジウムパネリスト発言要旨

文責 江連恭弘

1. 中国の戦争記念館について 姫田光義(中央大学名誉教授)

私は平和館・平和ミュージアムの建設に携わったことはありません。多摩区の登戸研究所の保存運動でも、20年以上もの活動を続けてこられた渡辺賢二さんらの方々に比べれば新参者です。ですから今日は登戸については山田朗さんと渡辺賢二さんにお任せし、ご参考までにということで、中国の動きについてお話しします。

ご存知のように中国では、平和記念館というよりも、日本の侵略戦争による被害実態を示す「犠牲者記念館」、日本の侵略軍と戦った「抗日戦争烈士記念館」の二種類があり、両者が分かちがたく展示されている場合が多いですが、い

ずれも愛国教育の一貫としてのモニュメントになっています。前者の代表的なものとしては、南京の大虐殺記念館、北京郊外の盧溝橋にある抗日戦争記念館、瀋陽の「九・一八」記念館とやはりその近くの「平頂山事件」記念館、ハルビン郊外の「七三一」部隊記念館、また最近開設された重慶爆撃を示す「重慶市規格展覧館」などがあります。それらだけでなく「三光作戦」による被害者を祀る比較的小規模なものは各地に沢山あります。目下問題になっている「従軍慰安婦」や私たち登戸研究所関係で発掘した「偽札つくり」などの被害のモニュメントはないようです。後者の「烈士記念館」はほとんど全国的で3000近い県の全県的といつても過言ではないほどありますが、これは革命烈士記念塔・烈士記念陵園という形が多いようです。今日、中国側の公式発表による被害者は3500万人、被害総額は5000億ドルということになっています(1995年の江沢民演説)、それ以前には何種類かの被害・損害数がありました。その後、各地の調査が積み重ねられて、このような数字になったもので、その調査の中心が各県レベルの中国共産党党史教研室とか政治協商会議の地方組織とかで調査研究・収集されたものです。ですから今後も変わる可能性もあるわけです。

「烈士」関係は抗日戦争を戦った戦士たちのモニュメントではありますが、当然戦って犠牲になったのですから犠牲者記念館に入れられてもよいわけです。両者の区別はかならずしも明確ではないはずですが、共産党・八路軍関係が重視される結果(今日では中華民族の結集軸といわれる)、一応の区別はされているということでしょうか。したがって「烈士」と「犠牲者」がいっしょに祀られているところもあるわけで、その一つに天津の強制連行被害者の遺骨を祀っているのが「天津戦役記念館」です。これは内戦時期の共産党・人民解放軍の勝利を記念したものですが、そこにもともとは戦後の日中関係が不正常な時期に、友好団体が中心になって両国が協力して発掘し送還した遺骨数千体が烈士記念堂のような粗末な建物に保存されていたものを、移転し安置したものです(中国紅十字会と中国人俘虜殉難者慰靈実行委員会とが協力して収集したものの一部)。

異色なのは、「撫順戦犯管理所」です。「加害者」が加害の実態を詳細に明らかにしたこと、「被害」の実態が実証されたわけです。ここでの元戦犯たちは帰国後「中国帰還者連絡会」を結成し、日本人に加害の実態を伝えつつ日中友好運動の一翼を担ってきました。ですからこの管理所を記念館とすることは、加害と被害との双方のモニュメントであり、その双方を認識することは侵略戦争の実相を明らかにするとともに日中友好の原点ともなるでしょう。

2. 「明治大学平和教育・登戸資料館」開設の意義

山田朗(明治大学教授)

現在、明治大学生田キャンパス(川崎市)には旧陸軍の登戸研究所(第9陸軍技術研究所)



姫田光義氏



山田朗氏

の建物が2つ残っており、そのうちの鉄筋コンクリート製の36号棟（農学部実験施設、平屋358平方メートル）をそのまま保存し、内部を資料館にしようというプロジェクトで進められています。

このプロジェクトは、長年の学内の検討を基礎としながら、元登戸研究所所員・の「登戸研究所のことを後世に残してもらいたい」という学長宛の手紙をきっかけに2006年に「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）の設置に関する検討委員会」が設置されて始まり、副学長が統括する企画として進行しています。2008年7月には資料館準備室を駿河台キャンパスに開設し、遺物・関係資料の収集・分類へと作業が始まりました。

明治大学が旧陸軍の秘密研究所の施設を保存し、遺物・資料を収集して展示する意義はどこにあるのでしょうか。それは第1に、この施設が、戦争と科学の関係（科学技術の戦争利用の極端な形態）、一般に知られない戦争の裏面（秘密戦）と加害の側面（風船爆弾による無差別攻撃、生物化学兵器の使用、偽札による経済謀略など）を最もよく示している数少ないものであることです。

そして第2に、今日、こうした施設の存在を客観的に見つめ直すことで、この展示資料館が、科学と戦争の関係、平和と人権の尊さを再確認する場、科学教育・歴史教育・平和教育の発信地としての役割を担うことができるからです。

明治大学はこうした重要な戦争遺跡を持ちながら、多年にわたってそれを放置し、大部分の建物・遺物を取り壊してきました。こうしたことへの反省もあり、現在、準備室での資料の収集・分類を進め、展示構想をまとめ、2010年3月には明治大学平和教育・登戸研究所資料館のオープンをめざして作業を進めています。



陸軍登戸研究所が作った偽札

3. 戦争遺跡の文化財指定の動向

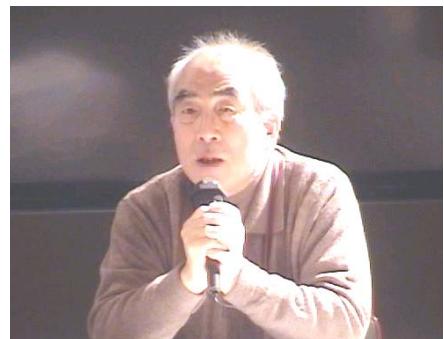
新井揆博(戦争遺跡保存全国ネットワーク)

資料 1 戦争遺跡の文化財指定の動向

文化庁記念物課は近代遺跡の全国調査を始め、「政治・軍事に関する遺跡」の所在調査は1998年度に進められた。「近代遺産(戦跡)の所在調査一覧」では、43都道府県から544件の戦争遺跡が報告され、文化庁はそのうち51件を詳細調査対象に選んだ。02~05年の詳細調査では松代大本營、舞鶴海軍施設群、日吉台地下壕、淺川地下工場などが現地調査され、遺跡分布地図、測量作成、証言・資料収集、学術調査を終え、報告書編纂中で2009年度に『近代遺跡調査報告書(9)政治軍事』が発行される見込みだが、12月6日現在刊行されていない。

1990年沖縄県南風原陸軍病院壕(07年に沖縄陸軍病院南風原壕に改称)の先駆的な文化財指定、1995年の文化財指定基準の拡大以降、19年間での行政・学会・市民運動の高まりで、指定・登録戦争文化財は157件に達している。

2009年7月現在の指定・登録された戦争文化財は、157件(前年比11件増)で、国指定文化財13件、県指定7件、市町村指定67件、国登録文化財57件、市区町村登録文化財11件、道遺産・市民文化資産3件(2009年7月現在 戦争遺跡保存全国ネットワーク調べ)



新井揆博氏

資料 2 戦争遺跡 慶應日吉キャンパスをはじめ日吉の特長

①戦争末期、海軍の中枢が日吉に入った。

軍令部第三部、連合艦隊司令部、航空本部、人事局、艦政本部、東京通信隊、

②海軍設営隊（第300・第3010・柳瀬隊など）による約5000mに及ぶ地下壕を掘った。

③海軍は地下壕を構築するために、近辺農家から強引に土地収用をすすめた。

④日吉は大きな空襲だけでも3回あり、多くの市民が家を焼かれ死者も出た。

⑤慶應義塾では軍隊にキャンパスを提供するが、一方戦争で2223名の戦没者を出した。

資料 3 平和ミュージアムについて

平和ミュージアムは、①戦争遺跡・遺物を通した平和学習の場。②戦争遺跡の調査研究の場。③平和に関する国際交流の場。④平和を日本全国に、そして世界に発信する場として位置づけたい。そのためには、平和ミュージアムができるだけ戦争遺跡の近くに作りたいものです。

☆若者の発表資料**平和とは何か？—ハト（鳩）からハートへ—**

専修大学附属高等学校 歴史社会研究会

はじめに

「鳩はなぜ平和の象徴なんだろう？」のような疑問が本同好会の活動中に出てきたのがきっかけとなり、今回調査するに至った。私たちは、その疑問を発端として、大きく3つの視点から「鳩と平和」の調査に取り組んだ。

1点目は、鳩の生態と象徴について。

2点目は、戦前の軍用鳩、戦争と鳩とのつながりについて。

3点目は、現代の鳩、平和の象徴である鳩がどのように捉えられているのか。

身近な“鳩”、聖書の中の“鳩”、軍事面での“鳩”など、様々な観点の鳩を体感していくことで、随所に、「聞いたことがある」、「なんだ！」という発見があるかもしれない。これにより、鳩に対する意識が良い方向に変わっていただければ幸いである。また、平和に対する認識を深めていただきたい。

I. 鳩の生態と象徴について**1. 鳩の生態**

鳩は、ハト目・ハト科に属する鳥類の総称である。ハト科鳥類には、胸骨と胸筋がよく発達し、体に比べて小さな頭部と先が丈夫そうで付け根の柔らかい嘴があり、嘴には鼻孔を覆う膜がある。他の多くの鳥類と異なりピジョンミルクというものを雛に与えて育てるのが特徴である。このミルクは、蛋白質・脂肪・ビタミンなどが含まれ、雌雄ともにこのミルクをつくっている。また、飲水行動も特徴があり、くちばしを直接水の中に入れてそのまま吸水することができる。

寿命は10～20年と言われ、他の鳥に比べて長生きする鳥である。食物は雑食性で 大豆・米・トウモロコシ・種子・ミミズ・カタツムリ・バッタなどを好んで食べる。通常、数羽の群を作るが、多いときは100羽以上の群を作つて行動することもある。性格は闘争的な性格の強い鳥で群が多くなると、カラスと戦うこともある。

鳩の種類としてはドバト、キジバト、シラコバト、アオバト、カラスバトなど何種類か代表的なものがあげられる。主に都市に生存しているのはドバトという種類である。ドバトは古く昔の人に飼い鳥として品質改良され、多くの人々の家に飼われていた。また食用や観賞用、伝書鳩、軍用にも用いられていた。

鳩の骨が縄文時代の貝塚からも見つかっているように、鳩は昔から日本列島と関わりがある。なお、「鳩」は在来種の総称であり、家で飼われる鳩（家鳩）は「鴿（ハト・イエバト）」と表記する。この「鴿」はカワラバト（河原鳩）を家畜化したもので、日本の在来種ではなく舶載されたものである。この家鳩は、平安時代には本格的に外国から日本にもたらされていた（平安時代以降の日本における鳩については、次節で説明する）。

鳩は、希少種も含めて鳥獣保護法によって保護された鳥である。そのため許可なく捕獲したり、雛や卵を採ったりすることは禁止されている。軍用鳩（伝書鳩）としての通信が目的で、ヨーロッパなどから盛んに輸入された（軍用鳩については、第Ⅱ章で説明する）。また、大正時代には農家の副業として食用鳩も輸入されたが、食習慣がないためか国内では定着することはなかった。

現在、ハトが都市に野生化するようになったのは、外国から持ち込まれた「イエバト」が逃げ出して次第に増えていったと考えられている。伝書鳩が帰還できずそのまま公園に棲みつくケースや、レース用の鳩がドバト化するケースもあった。戦前までは、主な生息地は神社や寺院などだったが、高度成長期に入り食料が豊富になり、人間の残飯による餌も増え、建設ラッシュにより、ビル・倉庫・大きな橋などが新たな営巣や寝床になり、著しく増加していった。加えて、もともとドバトの先祖である「カワラバト」は岩場の多い山や海岸の岩穴に住んでいた鳥だった。そのため、石やコンクリートで固められた都市環境が元来の生息地に似ているので、格好の巣場所になった（現在の鳩事情については、第Ⅲ章で説明する）。

2. 鳩の象徴性

オリンピックの開会式で鳩が放たれるシーンがある。オリンピックに限らず、国際的なイベントで、白い鳩を飛ばすことがある。何故鳩なのかと聞くと、それは「平和のシンボルだから」と多くの人がそう答える。しかしなぜ鳩が平和のシンボルなのだろうか。

鳩が平和のシンボルとなった理由は旧約聖書の「創世記」に記された「ノアの大洪水」にある。神が墮落した人類を一掃し、清らかな人間と動物だけを残そうとして、アダムの子孫であるノアの一族と動物のつがいを巨大な箱舟に乗せた。その後、神は40日40夜、豪雨を降らせ、地上を水没させた。ノアは陸地が現れたかどうかを調べるために、最初にカラスを、次に鳩を放すが、どちらもすぐ戻ってきてしまった。しかし、三度目の試みで鳩はオリーブの若芽をくちばしにくわえて戻ってきた。ノアはそれによって、水が引いて陸地があらわれたことを知ったという。このことから「オリーブをくわえた鳩」は平和、吉報をもたらす使者と呼ばれるようになったので、オリーブの花ことばも「平和」である。^{注1} またオリーブは成長に長い年月がかかる樹木だといわれている。オリーブは実がなりその実から油もとれる貴重な資源だったため、昔からその土地で紛争があると敵は最初にオリーブの木を切り倒したという。このことから、オリーブがある土地は長年紛争もなく平和だったと考えられていた。



以上のことより、キリスト教の国々では鳩は平和の象徴という認識であることがわかった。では日本ではどうなのだろうか。日本で鳩は「神様の使い」と言われている。鳩を使いとする神が八幡神である。^{注2} 八幡神というと、歴史的に源氏の氏神、軍神として有名である。日本全国の神社の中で、もっとも多いのが八幡神社で全国に二万五千社あるという。そのことから日本での信仰の深さがわかる。つまり、鳩は神聖なものとして考えられていたことがわかる。このように日本では鳩は平和の象徴ではなく、神の使いとして考えられていたようだ。しかし現在では高校生の私たちでさえも平和の象徴と言えば鳩と

イメージする。それはなぜだろうか。

世界に「鳩=平和の象徴」ということが広まったのは1949年パリ国際平和擁護会議で、鳩が銃器の上を飛んでいるデザインのポスターがピカソによって作られてからだともいわれている。右の絵はピカソが数多く描いた鳩の中の一つである。日本もこの絵の影響で鳩を神の使いではなく、平和の象徴と思うようになったのではないだろうか。

3. 日本古典における鳩

現在は鳩といえば平和の象徴として知られているが、それ以前、古典における鳩はどういう扱いだったのか。

奈良時代に諸国から白鳩が朝廷に献上されたことが記録として残っている。これは『延喜式』(10世紀初め成立)に縁起の良いもの(祥瑞)とされているからだ。他にも「鳩の杖」という宮中から老臣に贈られた杖がある。「鳩の杖」とは、頭部に鳩の形を刻みつけた杖で80歳以上の老臣に下賜されたものである。なぜ鳩の杖を贈るかというと、鳩はむせない鳥であったために老人が嘔せないように、という理由と老臣に長生きして欲しい理由から贈ったようである。また『今昔物語集』では、薬師寺の南大門の前に昔から八幡を祭って鎮守としていた。そのため、薬師寺で火災があった時、金堂二つの塔に鳩が多く集まって火の気を寄せず八幡が守ったと伝えられている。

一方、同じ平安時代の記事では鳩を不吉なものとして扱ったものもある。『源氏物語』夕顔巻では、光源氏が夕顔と宿る折に家鳩が鳴くのを聞いて夕顔が恐ろしがったことを源氏が回想する場面がある。貴族たちにとって鳩の鳴き声は聞き馴れず恐ろしいものだった。山家集に西行の「ゆふされやひばらのみねをこえ行けばすぐきこゆるやまばとのこゑ」という歌がある。このうたは物寂しく聞こえてくる鳩の声をうたっている。このように鳩は縁起の良いものとしてではなく、不気味なもの、恐ろしいものとしても扱われていた。

他にも、現代と同じ鳩糞の被害が昔もあったようだ。『大和本草』には、鳩の糞が一箇所に多く積もったことが原因で火事が起こるとある。また、ケンペルが書いた『江戸参府旅行日記』には、駿府城が炎上したのはその醸酵熱が原因であったとも記されている。(現代の糞被害については、IIIで説明する。)

また、日本古典の鳩を調べていると、鳩が戦の勝敗に左右する話も多かった。『陸奥話記』には、源頼義・義家と阿倍貞任との戦いの時、源側の加勢にかけつけた清原武則が二人に臣従を誓い八幡の神に祈ったところ軍勢の上を鳩が飛び回ったといわれている。また、『源平盛衰記』では、壇ノ浦の戦いの時、味方の劣勢をみて義経が八幡大菩薩に祈ったところ、自軍の旗の上に鳩が2羽止まった。その後源氏が勝利したともいわれている。さらに、頼朝が挙兵して石橋山で敗れ、倒れた木の穴に隠れていて、弓を差し入れて探られた時、鳩が2羽飛び出し難を逃れたといわれている。『曾我物語』では、3羽の鳩が頭に巣を作り、雛を産んだ夢をみて頼朝は八幡大菩薩の加護を受けたと思い平家追討の兵を挙げたと記されている。『古事談』では、源義家の家の室内に多くの鳩が入り、長押の上で口から椋の実を三粒落として死んだのを見て義家は凶事とし、岩清八幡に剣と駿馬を奉って行動を慎んだと記されていた。

II. 戦争と鳩

1. 戦争と鳩の関わり

軍鳩とは、日本軍の通信手段として使用されていた鳩の事で、1887年3月23日に陸軍省^{注3}にて伝書鳩を飼育し始めた事が起源である。飼育に関しては、第一次世界大戦で鳩通信を担当して活躍した、フランス陸軍のクレルカン中尉と、助手としてストリューブ軍曹、ワルキエイ軍曹を教官として招いた。更に中野の通信隊に「陸軍軍用鳩調査委員会」を置き、軍鳩の研究や育成の拠点としていた。

伝書鳩を使用した理由は、軍通信、師団通信等の有線、無線の通信手段があったものの、戦場では敵味方が入り乱れてしまう為に上手く使用出来なかつたからだ。また、鳩は帰巣本能が他の鳥と比べて優れているので通信手段として多用された。しかし、帰巣本能を利用している為、通信の往復や、派遣されている軍隊へ向けた通信には使用出来ない。例外として、往復可能な伝書鳩も少數存在したようだ。

2. 鳩以外の動物兵器

日本で使用されていた動物兵器は、軍鳩の他に軍犬、軍馬が大半である。

軍犬は主にシェパードやドーベルマンといった大型犬で、伝令、捜索、警戒、運搬等に使われていた。1933年には、歩兵学校と関東軍に正式に軍用犬育成所が設置され、1944年の時点で、陸軍は約1万頭の軍犬を所有していた。

軍馬は、訓練を受けた後、その適性により乗馬（人を乗せる馬）、輶馬（ばんば：車やそりを引かせる馬）、駄馬（だば：荷を運ばせる馬）に分けられ徴用された。第二次世界大戦時には、国内飼育数の約1/3の馬が軍部に徴用された。その数は総計で30万頭～40万頭に及んだ。

3. 戦後の伝書鳩

終戦後に、軍鳩として使用されていた伝書鳩は新聞社に譲られ、主に取材の際にフィルムや記事の運搬に使用された。通信機器の発達していなかったこの時代、スクープをより早く新聞社へ届ける伝書鳩は、当時非常に活躍した。また補足として、戦前では関東大震災時に、通信困難な場所からの通信文や写真の運搬をして活躍した。

軍鳩の名残を受けて、日本伝書鳩協会と日本鳩レース協会があり、各種のレースを主催している。また、1990年代後半から急速に伝書鳩の帰還率が低下し、70%以上の帰還率を誇ったレースでも、現在は60%にまで低下して、さらに下降傾向である。数千羽単位のレースでゴール0羽というのも起こっているらしい。これは1996年から急激に普及した携帯電話が原因なのではと考えられている。（鳩は体内磁石を利用して帰還するため、電磁波が悪影響していると考えられている。）また、帰巣本能が弱まったという説などがある。

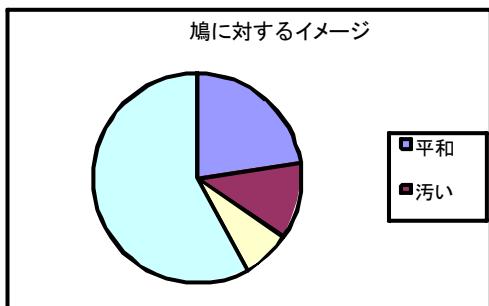
III. 鳩の現状

1. 鳩に対するイメージ

今回鳩のイメージを調べるためにあたって、専修大学附属高等学校の2年生350人にアンケートの協力をお願いした。方法は、顧問の皆川先生・杉山先生・及び日本史担当の講師の大森先生に依頼して、授業の最初の10分間程度で行った。質問は、以下にあげる10項目である。

- ① 鳩に対するイメージ
- ② 鳩=平和の象徴って知っていますか？
- ③ 鳩を飼ったことはありますか？
- ④ ③で“はい”と答えた人は苦労したことはありますか？
- ⑤ ③で“いいえ”と答えた人は飼ってみたいですか？
- ⑥ 鳩は何種類あると思いますか？
- ⑦ 伝書鳩とは何だと思いますか？
- ⑧ 鳩がつく有名人や会社など知っているものがあつたら教えてください。（複数回答可）
- ⑨ 鳩の鳴き声はどのようなものだと思いますか？
- ⑩ 鳩に一言あつたらどうぞ自由に伝えてください。

この中から我々は、①と⑤と⑩の質問を取り上げた。まずは、①の質問から鳩に対するイメージを述べる。



<表1>
平和…104人
汚い…55人
公園でみる…34人
その他…267人

鳩は平和の象徴であるから、平和が一番に出てくるのは理解できる。しかし、2番目に注目して欲しい。平和の象徴といわれている鳩からかけ離れたイメージの「汚い」がきている。この「汚い」というイメージは間違っていない。

以下の表2を見て欲しい。

<表2>

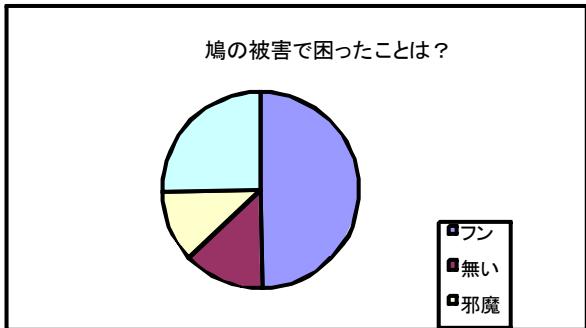
病名	症状
サルモネラ食中毒	集団食中毒の多くがサルモネラ菌によって起こる。鳩の約20%がこの菌を保有し、その糞から菌が空中に浮遊することでサルモネラ中毒が起こる。
脳炎	鳩も脳炎ウイルスを保有することがあり、コガタアカイエカの媒介によって人に感染する。高熱・頭痛・嘔吐があり、2・3日後に意識混濁・痙攣等が起こる。感染した人の20%は治っても手足の麻痺や知能障害などの後遺症が残る。
ヒストプラズマ症	Histoplasma capsulatum というカビの一種によって発病し、肺結核（注1）に似た症状を起こす。このカビは、鳩の糞に空気中の胞子が落ちて発生したもので、温度・湿度などの条件が揃うと急に増加し、この胞子が人間に触れると感染する。
クリプトコッカス症	この病気が人に感染すると軽症の場合は、皮膚炎程度、重症になると脳・脳髄膜に病巣を作り、死に至ることがある。ドバトの排泄物の中からも分離され、乾燥した排泄物やほこりと一緒に人体に吸収され発病する。
トキソプラズマ症	TOXOPLASMAGOND II という原虫が原因で起こる。妊娠がこの原虫に胎盤感染すると、急性颗粒結膜炎になってしまうことがあるのが、一般的な症状として知られている。

この表に示してある病気は、鳩の糞や羽毛にあるウイルスによって起こる病気である。つまり、みなさんのイメージ通り鳩は大変汚い生き物である。

2. 鳩被害の現状

ここでは、現在の鳩による被害についてグラフを用いて述べていく。

<表3>



このグラフから分かることは、ファンによる被害が圧倒的に多い。それを象徴するかのように、このようなコメントが⑩の質問に寄せられていた。

- ・もう少し計画を立ててファンをして下さい。
- ・邪魔だ！！
- ・ファンをするのを止めろ

以下のように、鳩を心底嫌っているコメントもあった。

“気持ち悪い。もうあの首のあたりとか色とかくちばしとかあのくちばしの上の丸いやつとか足とか。もう本当にいなくなればいいのに。”

以上より平和の象徴であるにも関わらず、多くの人に鳩が嫌われているのが分かる。なぜこのような状態になってしまったかを私たちなりに考察した。

1で述べたように、鳩の糞や羽毛には病原菌が多く存在している。これによって病気が増え、広く知れ渡るようになったことが、「汚い」と思われたきっかけではないだろうか。また、鳩が増えたことにより、駅前などで多く糞を見かけるようになったこともあるだろう。さらに、白い鳩は外見も美しく清廉なイメージがある。しかし、一般的なドバトなどの街で見かける鳩は、色も灰色がかっておりゴミを漁る行為などから、カラスと同じような印象を受けているようだ。このため、ドバトが“平和の象徴”に結びつかないのではなかろうか。

おわりに

ここまで、鳩についての調査結果を述べてきたが、その鳩と平和との関係とはいかなるものなのか。そもそも「平和」とは？その概念はどういうものなのだろうか。高畠通敏氏の論文から引用する。

平和というのは単に戦争のない状態ではないあらゆる意味で、力による抑圧による秩序を否定すること^{注5}

例えば、第二次世界大戦下での日本を例とすると、日本軍は女子供関係無く、見かけければ撃ち殺すという精神で侵略を進めており、その精神は軍だけでなく、日本国民にまで浸透していた。その原因として考えられるのは「富国強兵」、「一人十殺」などの当時の教育である。その教育が「まともな思想を持つ人が意見できない世の中」にしたのだ。この状態は精神的に平和でなく、高畠氏の述べる平和の概念に反している。では、平和にするにはどうすれば良いのか。高畠氏はこう述べている。

単に戦争のない状態という次元ではなく、暴力的な抑圧がなくなる構造を実現することを目標にしてゆきます。

戦争・抑圧が全くない=平和でない。戦争がないのはもっともだが、ある程度の抑圧は必要である。

抑圧=悪というのは偏見であり、全く抑圧がないのは、秩序がないのと同等だといえる。有能な指導者の下で、ある程度の秩序を保っている状態、それが平和なのである。

上記より、今まで述べてきたことを基に、私たちが考える平和の概念について述べる。鳩が戦争の動物兵器として利用されていたので、「鳩=平和」というようにつなげて考えることはできない。私たちは、今回の調査で多くの鳩に関する知識を得たことでこの結論に至った。

<注一覧>

- 注1 モクセイ科の常緑小高木。地中海地方の原産で暖地に育成。葉は対生、深緑、灰白色、革質。初夏、芳香ある淡緑白花を総状花序につける。果実は楕円形の核果で青いうちに採取し塩漬けにして食用とし、熟果からオリーブ油をとる。日本では瀬戸内海の小豆諸島で栽培。
- 注2 八幡神は「やはた」で、多数の旗を意味する。それが神名となったのは、その神を祭るときに多くの旗を立てたからだといわれている。古代では小児の形の神の生誕を祝う祭があり、そのときに多くの旗をたてた。若宮は多くは穀靈的存在あった。
- 注3 「陸軍省」第二次世界大戦以前の軍政機関のひとつ。
- 注4 結核菌が空気感染して人から人へうつる感染症の一種。主な症状は、軽い咳・微熱・血痰である。江戸時代頃までは不治の病とされていたが、現代は抗結核剤で治る。
- 注5~6 高畠通敏『平和研究講義』(岩波書店、2005年)。

☆第2回プレイベント

☆多摩丘陵の戦争遺跡を訪ねる ～戦争と人権を考えるバスツアー～

2009.10.25
谷藤基夫

〈コース〉

東急東横線・日吉駅出発～小田急線向ヶ丘遊園駅集合～調布飛行場掩体壕（三鷹市）～国立ハンセン病資料館～（昼食：バス内）～秋津の平和観音～日立航空機立川発動機製作所・変電所（東大和市）～向ヶ丘遊園着～日吉駅着

プレイベントというと何故か恒例の（？）雨の下にも関わらず、バス定員一杯の参加者で今年も恒例・好評の戦争展プレ・イベントが行われた。法政二高の江連先生の詳細な資料による全体説明と現地の保存の会の方々のガイドで、戦争と人権について深まった有意義かつ楽しいバスツアーであった。運転は本会会員の岡上さんで安心・安全そのもの、次回も是非と言う声しきり。

陸軍調布飛行場は帝都防衛のため日米開戦直前の昭和14年着工、昭和16年完成した広大



調布飛行場掩体壕



プレイベント参加者（国立ハンセン病資料館）

な飛行場である。終戦末期には最新鋭の戦闘機「飛燕」など約50機が帝都防衛の任にあたり、特攻隊「震天隊」も編成され、慶應出身の上原良司学徒兵もこの地から知覧に移動、かの地から特攻に飛び立っていった。敗戦後は米軍が接收、返還後は一部が東京都調布飛行場、味の素スタジアムなどの運動施設、公園として利用されている。都立武蔵野の森公園には調布飛行場の掩体壕2基が保存され、「掩体壕を保存する会」の方々に案内していただくことが

できた。掩体壕の実物とともに説明板、「飛燕」の模型や画像も展示され、保存の状態もかなり良いと見受けられた。更にガイドによる説明があれば、後世への史料の伝達は完璧に近いレベルになると思われる。

次の東村山市にある国立ハンセン病資料館は人権の問題を考える上で一度は訪れるべき施設である。かつてこの病は遺伝による業病などとされ、いわれなき差別の対象とされてきた。そこに戦前からの政府による強制隔離政策もあって、根強い偏見を人々の間にもたらした。現在は感染し発病するのは極めてまれで、化学療法の発達によって確実に治癒する病であるとされている。ホールでハンセン氏病についての全体把握のための映像を見た後、順路に従

って展示をガイド説明とともに見て歩いた。差別のために住域外の人々との交流も全く遮断され、子どもの教育は勿論、防火、防災に至るまで自分たちの域内で工面しなければならなかつた。そこで使われた様々な道具などの実物や写真が展示されている。一步域外に出れば不当な差別を受けなければならなかつた人々の無念の思いが伝わってくるようである。わけても婚姻が当然のように制限され、断種や避妊が戦後も当然のように行われていたという事実に戦後史の一断面を見る思いである。小泉内閣によるハンセン氏病患者への謝罪、ハンセン病予防法成立後も、九州地方で患者団体へのホテル利用が拒否されるという問題が起き、ホテルへの抗議どころか差別の言葉を羅列した投書が多くあつたという事実に、未だ私たちの心の中に残っている差別意識に思いを致さざるを得ない。館の入り口に立つ巡礼姿でさ迷う患者親子の像が目に焼きついた。



尊厳回復の碑

バスの中から見ただけだが秋津平和観音はB29の墜落跡地に米軍搭乗員の冥福を祈って建立された。搭乗員全員が20代。戦争とは敵も味方もなく前途ある若い命を奪い去るものと考えさせられる。

日立航空機立川工場・変電所跡は広々とした都立東大和公園の一画に保存されている。建物の壁面には1945年3月～4月の3回にわたる空襲で受けた無数の弾痕がそのまま残され、戦争の恐ろしさを今に伝える。1988年から東大和の市民グループが保存を訴える運動を行い、わずか4年後の1992年には都議会で変電所の保存が決まった。会発足後20年以上、未だ正式には保存が決まったわけではない日吉台地下壕と比べて、この違いは何か、検証が必要のように思う。

帰りには雨もあがって、近在の戦争遺跡を巡るバス・ツアーは、和気あいあいの中にも、参加者の心に歴史や戦争と平和、人の生きざまなど様々な思いを抱かせて終り、皆それぞれの思いを持って家路についた。



胎児標本慰靈のことば

☆国立になるとわるくなる？！

山田 譲

ハンセン病資料館・調布飛行場掩体壕・日立航空機変電所跡の見学会が10月25日にあり、参加させてもらいました。川崎・横浜平和のための戦争展のプレイベントとして企画されたバスツアーで、法政二高の江連先生にガイドをしていただきました。

調布の掩体壕では雨の中、現地の「保存する会」の方たちのご案内をいただき、普通では入れない掩体壕の中まで入る事ができました。ラッキー！です。日吉の地下壕のコンクリートとはちがって、えらく粗雑なコンクリートで「大地震がきたら崩落する」といわれて、そうだなあと思いました。

ハンセン病資料館は東村山市にあり、多摩全生園の付属施設です。入口に「高松宮記念ハンセン病資料館」と看板が出ていて、エッと驚きました。高松宮といえば海軍軍令部第一部（作戦部）所属の海軍大佐として、日吉の軍令部第三部にもよく出入りしていた皇族です。もちろん軍務には全く精通していない「名ばかり将校」です。以前、地下壕見学会に参加された方で姉といっしょに海軍人事局の理事生（事務職員）として日吉の第一校舎で勤められていた方が高松宮の話をされていました。なんとお姉さんが高松宮からラブレターをもらったそうです。困ったお姉さんのかわりに、その方は断りの返事を書いたのだそうです。そのお姉さんは戦後、日吉で知り合ったステキな海軍将校さんとご結婚なさったそうです。メデタシ！日吉の海軍にも秘められたロマンスが、いろいろあったようです。

その「日吉台某ナンパ事件」の高松宮にハンセン病資料館で「再会」するとは思いもよらませんでした。しかし現在は名称が変わって「国立ハンセン病資料館」です。中を見学すると驚く事ばかりです。戦前の全生園はハンセン病治療施設とは名ばかりで、まさに医療刑務所です。陰惨な懲罰房もあって、天井近くに小さな明り取りの窓と、床近くにも小さな食事差し入れ口があり、ほとんど真っ暗。暖房もなく、これが病人を収容する施設か！と怒りをおぼえました。

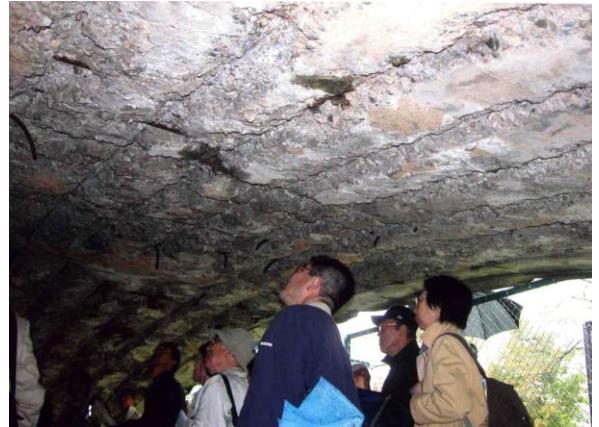
そしてもうひとつ、驚いたのはハンセン病療養所といいながら、患者たちに過酷な肉体労働を強制して病状を悪化させて平然としていた「医者」たちの存在です。彼らはどう見ても医者ではない。刑務官です。医学知識のある人たちが、医療とは正反対のことを平気でやってしまう。これは空恐ろしいことです。

しかし、帰りのバスの中で、江連さんから聞かせてもらったことはさらに驚きました。ハンセン病資料館が国立になったことで、逆に資料館の展示と学芸員の解説に大きな制約ができてしまったということです。国の施設となると、厚生労働省の旧悪を世間に広めることは国として不都合となる。だから学芸員さんも言いたいことを思うとおりに言えないのだということなのです。そういうことが今の世の中にはたくさんあるのだということも、今回の見学ツアーで学ばせていただきました。江連さん、ありがとうございました。

☆多摩丘陵の戦争遺跡を訪ねるバスツアーに想うこと

岡上 そう

今回のバスツアーの運転手を努めさせて頂きました会員の岡上です。ツアー参加者満員御礼となり、運転手として皆様を安全かつ円滑に目的地に向かうためにお手伝いさせて頂きました。



掩体壕の内部

日吉駅と向ヶ丘遊園駅で参加者を乗せ、まずは東京都調布市にある「調布飛行場の掩体壕」を見学しました。調布飛行場の敷地外に広がる公園にふたつ保存されている掩体壕。今回は特別に、普段入ることの出来ない内部へ入れてもらい、よりリアリティーに満ちた見学をすることが出来ました。この後軽い昼食（ツアー内容優先の為、コンビニに立ち寄り、各自車内で食べていただきました）を挟み、東京都東村山市にある「国立ハンセン病資料館」へ。

ハンセン病資料館では、まず1Fの映像ホールでハンセン病の歴史を現在に至るまで、ドキュメントでその内容を知ることが出来ました。なんて、簡単に書いてしまいましたが、実際にこの映像を見て、幾度涙を流したことでしょうか。私はハンセン病について全くの無知でしたが、見終った時には、己の無知という事への深い反省（会員として）と、このツアーに参加（運転手としても）して本当に良かった！と思えたのです。あの瞬間から私も一参加者として、このツアーを楽しめたと言っても過言ではないくらい、衝撃と感動が大きかったです。

映像ホールを出た後、職員の方による丁寧な案内により、展示室を3つ回り、それぞれのテーマ「歴史展示」「らい療養所」「生き抜いた証」に沿った説明を受けました。

癩（らい）－ハンセン病はらい菌による慢性の感染症です。「らい」と言う言葉は過去様々な偏見を伴って用いられ、患者、家族の方々の尊厳を傷つけてきた経緯があり、現在は「ハンセン病」という表現を用いています。（同資料館パンフレットより一部抜粋）

そして何より衝撃的だったのは、今もなお、このハンセン病資料館のある全生園というひとつ町となった「療養所」で、当時からの患者さんたちが生活し、また場合によっては資料館の語り部として、私たちにハンセン病の生き証人としての有りのままの歴史を発信し続けている事でした。この資料館は、なかなかアクセスの難しい地域にありますが、行ったことのない方には是非とも足を運んで頂きたい場所だと、自信を持って推薦します。

次に、資料館から車で5分の場所にある「秋津の慰靈碑」を車内から見学し、最終目的地である「日立航空機立川発動機製作所・変電所跡」へ。芋窪街道から一本道を曲がると大きな公園があり、変電所跡の建物はこの公園の中に保存されています。長閑に広がる緑豊かな公園の中に忽然と立ちそびえるこの建物は、まるで戦時中からタイムスリップしてきたような姿で、見る者を引き付けます。機銃掃射を受けた建物の壁面は、まるで今も背後から敵機が飛来してくるのではないかと、リアリティーに満ちた想像をさせてくれます。

結局、戦争はいずれ自らの居場所さえ銃弾と炎で奪われていくのだろうなあ、という気持ちになりました。帰り道は、立川～向ヶ丘遊園～日吉と、皆様を送り届け、私にとつてのツアーは無事終了しました。

戦争遺跡を保存するという事で、過去を知り、その過去の上に重ねられた歴史と「今」は、紛れもなく継続された事実であり、それはやがて未来に向かってゆく。その中で私は何を感じ、何を発信していくかなければならないか、活動の原点に再び立ち返ることを考えさせられた一日でした。今回、旅行会社並の優れたタイムスケジュールを管理、運営してくれた江連先生と会員の皆様方に、貴重な時間を過ごせました事を心より感謝いたします。



日立航空機立川変電所跡

☆活動の記録 (2009年11月～2010年1月)

- 11/6 運営委員会 会報94号発送 (慶應高校物理教室)
 11/7 定例見学会 47名
 11/11 地下壕見学会 (株)東急コミュニケーションズ 47名
 11/13 地下壕見学会 自衛官募集相談員静岡県東部連絡会 40名
 11/16 地下壕見学会 東急バス労働組合 58名
 11/19 地下壕見学会 新羽小学校6年生・先生 41名
 11/24 運営委員会 (慶應高校物理教室)
 11/26 地下壕見学会 セカンドライフ協会 24名
 11/27 地下壕見学会 川崎市立西中原中学校 9名
 11/28 定例見学会 57名
 12/5～6 第17回川崎・横浜 平和のための戦争展 (川崎市平和館)
 テーマ 「私の街から戦争が見える」《 戦争遺跡を地域の文化財に 》
 展示 登戸研究所・蟹ヶ谷地下壕・日吉台地下壕・市民が描いた戦争の記憶・
 小池汪写真展
 文化行事 (くちびるに歌を 心に平和を)・若者の発表・シンポジウム 参加者300名
 12/9 地下壕見学会 かわさき市民アカデミー 45名
 12/10 地下壕見学会 矢上小学校6年生・先生 108名
 12/15 運営委員会 (慶應高校物理教室)
 12/17 地下壕見学会 日吉南小学校6年生・先生 86名
 12/19 定例見学会 40名
 12/21 地下壕見学会 駒林小学校6年生・先生 94名
 12/24 地下壕見学会 洗足学園高等学校13名
 12/27 地下壕ガイド学習会 (菊名フラット)
 1/16 日吉の戦争遺跡ガイド養成講座 (来往
舎中会議室) 保存の会新年会
 1/19 地下壕見学会 かわさき生活クラブ生協 16名
 1/20 地下壕見学会 港北区役所 講座「わがまち港北を学ぶ」 60名
 川崎・横浜平和のための戦争展実行委員会(法政第二高校教育研究所)
 1/23 定例見学会 15名

予定

- 1/26 運営委員会 会報95号発送 (慶應高校物理教室)

☆☆定例見学会(第4土曜日 13:00～)

2/27・3/27・4/24・5/22

地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで 045-562-0443 (午前・夜間)

連絡先(会計)亀岡敦子:〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 Tel 045-561-2758

(見学会・その他)喜田美登里:横浜市港北区下田町2-1-33 Tel 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/> (新アドレス)



今年も元気に頑張ります 運営委員

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会